

I. 歓迎とレビュー

A. おはよう! おはようございます! カルバリーチャペル岩国へようこそ。

1. *新しい顔ぶれやオンラインストーリーミングを歓迎する。*

B. これ以上話を続ける前に、小学生の子どもたちを日曜学校の教室に解散させよう。

1. *(2<sup>nd</sup>礼拝; 聖書英語のクラスは忘れずに解散する)*

C. 今朝、ヘブル人への手紙の一節一節の学びを続ける中で、私たちはまた新たな難解な聖句に出会うことになる。

1. 多くの議論や論争を引き起こし、キリストの体を分裂させるためにさえ使われてきた聖書の一部である。

2. それが真実であることは悲しいことだ。私たちは先週、肉体が交わりのうちに集まり、互いを思いやる重要性を読んだばかりだからだ。

a. それは、キリストのすべてと私たちのためにしてくださったすべてのことに基づいて、私たちが意図的かつ目的を持って行うべき3つのうちの1つである。

b. 先週、私たちは、キリストが私たちのためにしてくださったすべてのことと、キリストに従う者として、神に近づき、告白を堅く守り、互いを思いやるべきであることを述べた。互いを思いやることの一部には、私たちが交わりのうちに、キリストの体として一致するために集まる必要性が含まれている。

c. だから、物事が私たちを引き裂くのを許すたびに、私たちは自分自身を傷つけ、キリストの体に害をもたらしているのだ。

3. キリストの体が分裂してしまうのは悲しいことだ。特に、神の御言葉とその理解に関することに関してはなおさらだ。

a. 神の御言葉の中には、白か黒かはっきりしないものがある。それらは理解するために非常に明確である。

i. イエスは私たちの罪のために十字架で死なれ、3日後に罪と勝利のうちによりみがえられた。聖書はこのことについて非常に明確である。

• イエスは言われた。"人の子は罪深い人の手に渡され、十字架につけられ、三日目によりみがえらなければならない"。(ルカ24:7)。

ii. イエスは神の子である。これについても聖書は非常に明確だ。

• 父なる神ご自身が、イエスについてこう証言さ。(マタイ3:17)

b. 私たちの限られた理解力では、矛盾しているように見えることもある。

i. 聖書は、神が私たちを選んだことをはっきりと教えている。神は私たちを定命された。

• エペソの信徒への手紙には、「神は、世の基が造られる前から、私たちを御自分のうちに選び、愛のうちに、御自分の前に聖なる者、責められるところのない者とされた。(エペソ1:4-5)

ii. そして同時に聖書は、神にゆえ、神とその福音のメッセージを受け入れる必要があるという人間の責任を明確に教えている。

• イエスはヨハネによる福音書3章16節でこう言われた。"神が世を愛されたのは、その独り子をお与えになったからである。(ヨハネ3:16)

• ローマ人への手紙には、"主の御名を呼び求める者はだれでも救われる"とある。(ローマ10:13)。

C. 聖書の中のある事柄を調和させるのは難しいかもしれない。今朝、私たちの前にある文章は、聖書全体、そしてヘブル人への手紙の中でさえ、理解するのが難しく、調和させるのが難しい事柄を扱っている。

4. 今朝のテキストでは、手紙の中で著者が述べているもう一つの厳しい警告に触れる。

5. ヘブル人への手紙には5つの非常に厳しい警告が記されており、著者は聴衆を潜在的な危険や信仰の落とし穴から守るための方法として、その警告を聴衆に伝えている。

a. 著者が最初に述べた警告は、漂流し、救いをないがしろにすることへの警告だったことを覚えているだろうか。

i. 2章で、著者は「私たちは、聞いたことにもっと真剣に耳を傾けなければならない。(ヘブライ2:1)。

ii. これほど大きな救いをないがしろにするなら」(ヘブライ人への手紙2:3a)、どうして刑罰を免れることができるのか、と彼は疑問を呈した。

b. 次に著者は、不信仰の危険性について聴衆に警告した。

i. 兄弟たち、あなたがたのうちに、生ける神から離れる不信仰の悪い心がないように、気をつけなさい」(ヘブライ3:12)と書いている。

C. そして第6章で、著者は聴衆に怠惰の危険性、信仰において成長しないこと、成熟しないことを警告した。

i. 著者は聴衆に、キリストの初歩的な原則[霊的なABC]の議論から離れ、完全なもの、成熟したものへと進むよう呼びかけた。(ヘブライ6:1a)

ii. 怠け者にならず、信仰と忍耐によって約束を受け継ぐ人々に倣いなさい」(ヘブライ6:6)。(ヘブライ6:12)。

6. そして今、この10章では、ヘブル書の5つの警告のうち、4番目の警告が語られている。この第4の警告は、おそらくすべての警告の中で最も厳しいものであろう。

D. 今朝は、ヘブル人への手紙10章26節から31節をテキストに、「**危険：背教に注意**」というタイトルで学ぶ。

1. 今朝、皆さんが聖書を持っていることを願っている。そうでない方は周りの椅子の下にある聖書を借りて読んでいただきたい。私たちは、皆さんが御言葉を読むことが大切だと考えている。
2. 聖書を手にも、ヘブル人への手紙第10章に進んでほしい。そして、そこに着いたら、神と神の聖なる御言葉に敬意を表して、立ち上がっていただきたい。
3. 私のバイブルからテキストを読み上げる。
4. ヘブル人への手紙の著者は、この手紙の第10章で、さらに別の強い警告を続けている。

## II. イントロ

A. これらの節に入る前に、これらの節が書かれている全体的な流れと文脈を思い出してほしい。

1. 先週、ヘブル人への手紙の後半重点が変化していることを指摘した。
  - a. この本の最初の10.5章は、キリストの優位性と優越性を論証することに主眼が置かれている。キリストは何にもまして、誰よりも優れている。それは、キリストがより優れているすべての事実を私たちと共有する、より情動的なものであった。
  - b. しかし、著者は議論を終えた今、その焦点を情動的なものから応用的なものへと移している。
  - c. 本書の最後の3.5章は、私たちの信仰、特に信仰に足をつけることを強調している。著者は私たちに、主が分かち合ってくださいとくださった情報を受け取り、それを私たちの生活に適用してほしいと願っている。それは、私たちが日常生活の中でこれらの真理を実践するためである。
2. だから、行動することにはっきりと重点が置かれている。私たちがこれらの真理を受け止め、キリストにある私たちの人生に影響を与えることを可能にする。

B. そのような状況の中で、著者は4つ目の警告、すなわち背教の危険についての警告を出したのがある。

1. ここで、私が「背教」という言葉を使うときに何を意味しているのか知らない人がいるかもしれないので、あるいは単に私が「背教」と言うときに何を意味しているのか混乱を避けるために、少し時間をとってこの言葉の簡単な定義を共有したいと思います。
  - a. 棄教とは、それまで持っていた宗教的信条や信仰を捨てたり放棄したりすることで、多くの場合、別の信条や無信仰を好む。

2. 聖書、特にNTに関して言えば、背教とは、かつてキリストの福音を信じ、キリストの信者であると主張していた人が、キリストから離れ、信仰を放棄し、以前の宗教的信念に戻るか、あるいは単にキリストとその福音をもはや認めない未信者となることである。

3. 背教の危険は非常に現実的だ。誰かが信仰から離れることはあり得る。だからこそ、聖書は繰り返し背教を警告し、信仰を堅持し、信仰に耐え、忍耐し、道を守り、右にも左にも曲がらないように勧めているのだ。

a. 1テモテ4:1には、こう書かれている。"さて、御霊は、後の世には、惑わす霊や悪霊の教理に心を傾けて、信仰から離れる者が出てくると、はっきりと言われています。"。(1テモテ4:1)

b. イスカリオテのユダは、キリストに逆らったキリスト信者だった。デマもまた、一度は主に従ったものの、世を愛するがゆえに従わなくなった者の例であるようだ。

4. 文脈のもう一つの重要な側面は、著者がののかを理解することである。著者は主に、迫害を経験し、ユダヤ教に立ち戻るよう圧力を強めているユダヤ人信者のグループに向けて書いている。

a. 著者は、現実が目の前にあるのに、影に隠れて奉仕するために戻ってはならない。

b. イエスの方が優れていると主張する背景には、ユダヤ教に立ち返ろうとしていたユダヤ人たちの信仰を強化する目的があった。著者は最初の10.5章を費やして、彼らがキリストにあって持っているものは、律法に従って持っているものよりも、また律法に従って持っているものよりも、はるかに優れていることを説明した。

c. つまり、背教に対するこの警告は非常に現実的なものだったのだ。著者が書き送った人々の多くは、キリストへの信仰から離れ、かつてのユダヤ教信仰やモザイク律法の実践に戻るよう誘惑されていた。

5. しかし、この警告は、著者が書き送った1世紀のユダヤ人信者だけに向けられたものではない。この警告は私たちにも向けられたものなのだ。

6. 1世紀のユダヤ人にキリストから背を向ける危険があったように、現代の私たちにも同じ危険が残っている。

7. 私たちはモザイク律法のためにキリストを捨てようという誘惑には駆られないかもしれないが、キリストのもとに来る前の古い生き方、つまり「キリスト以前」の紀元前の時代に戻ろうという誘惑に駆られる人もいるかもしれない。

8. だから、私たちはこの警告を真剣に受け止め、この節で著者が私たちに警告していることに細心の注意を払わなければならない。

C. 今朝のテキストを読みながら、背教には何が関係しているのか、そしてこの警告をどのように心に留め、キリストへの信仰から背を向けることがないようにすることができるのかを考えてみたい。

D. 冒頭の聖句をもう一度見てみよう。背教について、また背教がどのようなものであるかについて、いくつか記しておこう。

### III. ヘブル10:26;

A. 文脈を離れて表面的に見ると、この聖句は非常に憂慮すべきものであり、率直に言って恐ろしく聞こえる。私たちの罪のためのいけにえがもはやないという考えは、非常に深刻な問題である。しかし、ここで本当に言われていること、そしてそれが私たちにとって何を意味するのか、もう少し詳しく見てみよう。

B. 節はこう始まっている。

1. もし私たちが故意に罪を犯すなら」と書くとき、著者はここで一体何を意味しているのだろうか？ また、それは誰に当てはまるのか？ 故意に、あるいは故意に罪を犯す人に当てはまるのだろうか？

2. 最初に言うておくが、この節は単に故意に罪を犯したクリスチャンについて語っているのではないと思う。

a. 聖書は、クリスチャンであっても、生まれながらの信者であっても、私たちはまだ罪を犯し、故意に罪を犯すことさえあると明言している。

i. 信じられないか？ ここにいる皆さんの中で、進んで制限速度を超えて運転している人はいるだろうか？ 嘘をつくことは罪だと知りながら、わざと事実と異なることを誰かに話したことがあるだろうか？ 義憤に駆られたわけでもないのに、誰かに腹を立てたことがあるだろうか？

ii. 私たちは誰でも罪を犯すし、多くの場合、故意に犯すことさえある。

b. しかし、このことで悩んでいるのは私たちだけではない。使徒パウロもそうだった。

i. ローマ人への手紙の中で、彼はこう書いている。"私が行おうと思う善は行いません。(ローマ7:19)。

ii. キリスト・イエスが世に来られたのは、罪人を救うためであり、その罪人の中で私が一番偉いのです」(1テモテ1:15)。(1テモテ1:15)

C. 弟子のヨハネも、自分の人生における罪の位置を理解していた。(1ヨハネ1:8)

d. 私たちはみな罪を犯す。みんな罪と闘っている。だからといって、私たちのための犠牲はもはや残っていないのだろうか？

e. いや、意味ではない。この聖句は、自ら進んで罪を犯し、その結果、キリストのいけにえが適用されなくなった人のことを言っているのではない。

i. 一度でも故意に罪を犯せば、主の前での立場を失い、主の恵みがれ、再び絶望的に罪の中に迷い込み、地獄に落ちる運命になるわけではない。

- ii. もしそうなら、誰も天国に行けないだろう。なぜなら、私たちはみなまだ罪を犯し、罪と闘っているからだ。
  - iii. 私たちが罪を告白するなら、神は忠実で正しい方ですから、私たちの罪を赦し、すべての不義から私たちをきよめてくださいます」(1ヨハネ1: 9)。(1ヨハネ1:9)
  - iv. 私の幼な子たちよ、これらのことをあなたがたに書くのは、あなたがたに罪を犯させないためである。もしだれかが罪を犯すなら、わたしたちには父との弁護者、すなわち義人であるイエス・キリストがいる。"(1ヨハネ2:1)(1ヨハネ2:1)
  - v. キリストを信じるようになった後も、私たちは罪を犯す。しかし、もし私たちが罪を告白するなら、神は私たちの罪を赦してくださる。
  - vi. だから、この聖句は、キリストを信じるようになってから罪を犯したら、希望がないとは言っていない。そうではない。
3. もしそれが著者の言っていることでないなら、彼は何を言っているのだろうか？
4. 動詞sinは現在能動分詞で書かれ、終わりのない継続的な行為を語っている。これは、継続的な故意の罪、または継続的な故意の罪を語っている。
- a. 意図的に、意図的に罪を犯し続けるということだ。
  - b. 先ほど著者が語ったこととは対照的だ。意図的に、意図的に神に近づき、告白を堅く守り、互いを思いやる代わりに、それらのことを意図的に行う代わりに、私たちは意図的に罪を犯し続ける。
- C. 真理を知った後に故意に罪を犯すなら、もはや罪のためのいけにえは残らない。
1. さて、真理を知るとはどういうことか。これには2つの見方がある。
- a. ひとつは、福音を受け、生まれながらの信者である人のことを指している。
    - i. ここで言う「知識」とは「エピグノーシス」[ep-ig-no-sis]という言葉で、個人的な関与を主張する知識のことである。単に何かについて知っているということではない。何かを知り、それを自分のものとして個人的に主張することなのだ。
  - b. もうひとつの見方は、福音を明確に説明されそれを知ってはいるが、まだ完全に受け入れていない未信者というスタンスだ。
    - i. 人は福音の真理を知的に聞き、理解しても、心は動かされないままである。
    - ii. しかし、彼らが聞いた言葉は、それを聞いた人々の信仰に結びつかず、彼らを益することはなかった。"(ヘブライ人への手紙4章2節)。(ヘブライ4:2)。

2. さて、この聖句は見方によっては非常に難解な部分となる。

- a. もし、この人が信者であるという観点から見ると、信者の永遠の保障に疑問を投げかけることになる。キリストを信じるようになった人が、その後キリストへの信仰から離れる可能性が出てくる。
- b. 未信者の立場からそれを見るなら、テキストの平易な読み方を変えたり、ある文脈ですでに使われている言葉の意味を変えたりして、それをうまく機能させるための頭の体操をしなければならない

3. せよ、挑戦的である。だからこそ、この文章をめぐって多くの議論や討論が行われているのだ。

4. 私はどちらの立場からもケースを提示することができる。

- a. もしこれが、キリストを信じるようになったにもかかわらず、故意に罪の生活を続けている人のことを語っているのだとしたら、私はヨハネの福音書15章に行くことができる。
  - i. わたしはぶどうの木であり、わたしの父はぶどう栽培者である。わたしはぶどうの木であり、わたしの父はぶどう栽培者である。わたしの中の実を結ばない枝はみな取り去られ、実を結ぶ枝はみな、より多くの実を結ばせるために刈り込まれる。わたしがあなたがたに語った言葉のゆえに、あなたがたはすでに清くなっている。わたしのうちにとどまりなさい。枝がぶどうの木にとどまらなければ、自ら実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにとどまらなければ、実を結ぶことができない。私はぶどうの木であり、あなたがたは枝である。わたしのうちにとどまり、わたしが彼のうちにとどまる者は、多くの実を結ぶ。わたしがいなければ、あなたがたは何もできないからである。わたしにとどまらない者があれば、その者は枝として追い出され、枯れる。(ヨハネ15:1-6)
  - ii. イエスはこれらの箇所を用いて、キリストに留まり続けることの重要性、つまりキリストへの信仰を継続する必要性を表現された。
  - iii. 父はぶどうの木を植える方であり、私たちは枝である。もし私たちがキリストにとどまらなければ、実を結ぶことはない。もし実を結ばなければ、私たちは連れ去られ、ぶどうの木から外され、他の実を結ばない枝と一緒に集められ、火に投げ込まれる危険がある。
  - iv. 私たちには、キリストへの信仰を一度だけ告白するのではなく、キリストにとどまる継続的な生活が必要なのだ。私たちはキリストを信頼し、キリストにある人生を生き続けなければならない。もし私たちがキリストを見捨てるなら、私たちは何もできなくなり、脇に追いやられ、火に焼かれるだけになるだろう。
  - v. 聖書は、忍耐することの必要性をはっきりと教えている。信仰を継続すること、信仰を堅く守ることが必要なのだ。私たちには、イエス・キリストの完成された御業にすべての希望と信仰を置き続ける責任がある。

b. もしこれが、単に福音を聞いて、それを受け入れるという軽率な決断をした、未信者のことを言っているのだとしたら、私は"種まきのたとえ"のようなところに行くことができる。

- i. このたとえは、岩場と雑草の落ちた種があったことを教えている。その種は成長し始めたが、時が経つと枯れ果ててしまった。実を結ぶことはなかった。
- ii. 同じことが人々の心や人生にも起こりうる。福音を聞き、信仰を表明しても、時が経てば本当の成長はなく、根も張らない。
- iii. 見た目はそれなりだが、本物ではなかった。
- iv. このことは、ヨハネがヨハネの手紙第一の2章に書いたことを思い起こさせる。ヨハネは、信仰を離れた人々を、決して信仰の一部ではなかったと表現している。「もし彼らが者であったなら、私たちと一緒にいたはずである。(1ヨハネ2:19)

v. もし本当に信者であったなら、棄教などするはずがないからだ。

vi. イエスを知らないのにイエスを知っていると言う人がいる。パウロはテトスへの手紙の中で、そのような人々について述べている。

- パウロは彼らのことを、神を知っていると公言しながら、行いにおいては神を否定し、忌み嫌われ、不従順で、あらゆる善い行いに不適格な者たちだと言っている」(テト1:16)。(テト1:16)。
- 主よ、主よ』とわたしに言う者が皆、天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを者が、天の御国に入るのである。主よ、主よ、私たちは、あなたの御名によって預言し、あなたの御名によって悪霊を追い出し、あなたの御名によって多くの不思議なことをしたではありませんか。主よ、主よ、私たちはあなたの御名によって預言し、悪霊を追い出し、あなたの御名によって多くの不思議なことをしたではありませんか。(マタイ7:21-23)

5. だから、どちらの立場からも主張できる。それを好まない人もいるかもしれないが、適用範囲はどちらもある程度同じなのだから、そのことで意見が分かれる必要はないと思う。

6. どちらの状況においても、真の信仰者はその実によって知られることを私たちは知っているし、理解している。

a. もし誰かが故意に罪を犯し続けるなら、信者であろうと信者でなからうと、彼らは自らの行動を通して、キリストのうちにいないことを示しているのだ。

b. キリストとキリストのいけにえ以外には、罪のためのいけにえはありえないからだ。

D. 勉強を続けて、27一緒に見てみよう。

IV. ヘブル10:27;

A. ここで著者は裁きについて語っている。もし罪が赦されないなら、その人にとって唯一の選択肢は裁きを期待することである。

1. ここで裁きという言葉は、最終的な裁き、つまり、人が主の前に呼び出され、自分の罪に対する神の備えをどうしたかによって裁かれる日について使われている。これはしばしば「大いなる白い御座」の裁きと呼ばれる。

2. もし彼らがキリストの完成された御業に信頼して罪を赦されなかったのであれば、それは彼ら自身の罪に対して答えを出さなければならないことを意味する。

a. ヨハネの黙示録20章にはこう書かれている。「わたしは、死者が小さい者も大きい者も神の前に立っているのを見た。そして、もう一つの書物が開かれた。そして、死者はその働きにしたがって裁かれた。(黙示録20:12)

3. そして、その罪の罰として、死と、地獄と呼ばれる消えない火の場所で神から永遠に引き離されるという罰を受けなければならない。

a. そして、命の書に書かれていない者は、火の池に投げ込まれた(黙示録20:15)。(黙示録20:15)

B. この神の裁きについて、私と一緒に考えてみよう。

1. その1、この裁きは確かなものである。この文章では「確実」という言葉が強調されている。この裁きは確かに来る.....そこに不確かさはない。

a. ヨハネによる福音書5章22節によれば、神の裁きは確実であり、その裁きはキリストに委ねられている。父はだれをも、すべての裁きを子に委ねておられる。御子を敬わない者は、御子をお遣わしになった父を敬わないのである。"と言われた。(ヨハネ5:22-23)。

b. イエスは裁きに関して、ご自分が何をしておられるかを知っておられる。「主は、善良な者を誘惑から救い出す方法を知っておられ、不正な者を裁きの日のために罰の下に留められる。(2ペテロ2:9)

c. 彼は、誰が彼とともにいて、誰が彼に反対していたかを知るだろう。その選択肢は二つしかない。イエスは言われた。"わたしとともにいない者は、わたしに逆らう者であり、わたしとともに集まらない者は、散らばる者である"。(ルカ11:23)

d. 裁きは確実で、極めて単純なものだ。あなたはキリストと共にあったか、キリストに敵対していたかのどちらかだ。そしてキリストは、キリストとともにいる者を知っている。

2. その2、この裁きは恐るべきものである。恐れ多い」という言葉には、何かが恐ろしい、恐ろしい、おぞましいというイメージがある。

a. 地獄は盛大なパーティーのようなもので、人々が永遠に罪深い快樂に溺れる場所だと勘違いしている人がいる。これほど真実からかけ離れたことはない。

b. 地獄でパーティーをする人はいない。そこは恐ろしく恐ろしい場所であり、完全な暗闇と消えない炎の場所である。大いなる苦痛と苦悩の場所であり、聞こえてくるのは泣き叫ぶ声と歯ぎしりだけである。

c. そこは永遠の苦しみのある場所である。黙示録14:11には、地獄で苦しめられる者たちの煙が昇りつづけ、昼も夜も休むことがないと書かれている。(黙示録14:11a)

d. どうか、地獄とは何かについて間違った考えを持たないでほしい。地獄は実在し、恐ろしく恐ろしい場所なのだ。

3. その3、この判決は完全なものである。

a. この裁きは、神の敵対者を焼き尽くす神の激しい憤りという恐るべき期待をもたらす。この激しい憤りは、地獄の消えない火のことを言っている。

b. この裁きが完全なものになると言ったのは、裁きに直面する者すべてを完全に焼き尽くすということだ。逃げ場はない。この火は、神の敵、神に敵対するすべての者を焼き尽くす。

c. もう一度言うが、可能な結果は2つしかない。神の御子の賜物と、信仰による恵みによって私たちに提供される罪の赦しを受け入れるか、死と神からの永遠の分離という罪の報いを受けるかだ。

i. ローマ人への手紙6章23節には、「罪の報酬は死ですが、神の賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠の命です」とある。(ローマ6:23)。

d. 可能性は二つしかない。罪の赦しか、罪の報いか、神とともに生きる永遠の命か、神から離れた永遠の死かだ。それ以外の結果はない。あなたがこの地上で息を引き取るとき、それはこの2つのうちのどちらかである。

e. そして、私たち全員が罪の赦しと、天国での神との永遠の命の賜物を選ぶことを祈る。地獄は悪魔とその手下、敵対者のための場所であり、あなたや私のための場所ではない。しかし神は、天国で神と共にあることを強制したりはしない。神は私たちに選択肢を与えてくださる。

f. 賢く選択し、主であり救い主であるイエスに人生を委ねることが不可欠なのだ。

C. 次の2節を見よ。ここでは、背教に対するこの警告に関わるもう一つのことに注目する。28節と29節と一緒に読もう。

V. ヘブル10:28-29;

A. ここで著者は、比較によってもう一つのポイントを示している。著者はこの手紙の中で何度もこのような比較をしている。

1. 28節で、著者はモーセの律法を拒否した者が、二、三人の証人の証言によって憐れみもなく死ぬことに触れている。
    - a. 民数記15章には、生まれつきの者であろうと、よそ者であろうと、僭越に（反抗的に）何かをする者は、主に批難をもたらし、その民の中から断ち切られる（死刑にされる）。その人は主の言葉を軽んじ、主の戒めを破ったので、完全に断たれ、その罪はその人の上にある。（民数記15:30-31）
    - b. 申命記17:6には、「死に値する者は、二人または三人の証人の証言によって死刑に処せられる」（同17:6a）とある。
    - c. つまり、モーセの律法の下で、古い契約、劣った契約、より弱い契約、より小さい契約の下で、故意に、反抗的に罪を犯した人々は、2人が3証人によって死刑にされた。
  2. 神の言葉に耳を傾けず、より良い契約である新しい契約を故意に、そして反抗的に破った者は、どれほどひどい罰に値すると思われるだろうか？
  3. 旧約に対して故意に罪を犯した者が死を要求されるのであれば、新約に対して故意に罪を犯した者は、ひどい目に遭うだろう。それは、小さいものから大きいものへの議論だ。より小さい契約では死が要求されたのなら、より大きい契約ではそれ以上のことが要求される。
- B. ここでわかるのは、背教に対するこの警告は、キリストと、キリストが世のためにしてくださったすべてのことを**完全に拒絶すること**を含んでいるということだ。

1. 29節は、その意志的な罪がどのようなものかを描写している。それはキリストを完全に拒絶することである。
  - a. 神の子を足元で踏みじっているのだ。
    - i. 子を踏みじるという考えは、最大限の軽蔑と侮辱をもって扱うという比喩的な意味で使われている。誰かを軽蔑し、全く軽蔑することを意味する。
    - ii. これは、特に著者がキリストの優位性を主張していることを考慮すると、非常に強い非難である。
    - iii. キリストがどんなものよりも、誰よりも優れていることを知っていながら、そのキリストを汚物のように、自分がもののように扱うのは卑劣なことだ。
  - b. 神の御子を足元で踏みつけているだけでなく、御子が聖別された契約の血をありふれたいるのだ。
    - i. ここで、著者はこのキリストの血によって聖別されたと明確に語っていることから、この人物が未信者であると特定するのは難しい。
    - ii. この章の前の方で、著者はこれと全く同じ言葉を使って、イエスが一度の捧げ物によって、聖別されつつある人々を永遠に完成されたことを説明している。（ヘブライ10:14）。

- iii. これは、主の血の贖いの力について明確に言及している。
  - iv. しかし、キリストを拒絶することは、キリストの血をありふれたもの、特別なものとして扱うことなのだ。
  - v. 基本的に、キリストの特別なものではなく、贖いの力はいるのだ。著者がヘブル書でこれまで積み上げてきたキリストの血と、それが私たちの罪を赦し、私たちの罪を取り除く力に関するすべてのことに反して、故意に罪を犯し続ける人は、キリストを拒絶し、キリストの流された血を無であるかのように数えているのである。
  - vi. 新しい契約を確立するために流されたこの血は、何もなかったかのように扱われる。そうすることで、そのような人は、自分の罪を贖うための犠牲もなく、自分の罪の重さのすべてを、自分以外の犠牲によって被ることになる。
- C. そして最後に、それが十分悪いことでなかったかのように、この人物は恵みの御霊を侮辱している。
- i. 私たちを救いに導くのは神の霊である。そもそも私たちのそばに来て、赦しの必要性を確信させてくれたのは聖霊の働きなのだ。
  - ii. キリストを拒絶するとき、私たちは恵みの御霊、聖霊を拒絶することになる。これは赦されざる罪の記述だと思う。
  - iii. しかし、聖霊を冒涇する者は決して赦されることはなく、永遠の断罪を受けるのである」（マルコ福音書3: 28-29）。（マコ3:28-29）。
  - iv. キリストが私たちのためにしてくださったすべてのことを完全に拒絶し、恵みの御霊を侮辱するなら、私たちに希望はない。私たちの人生における聖霊の働きなしには、私たちがキリストのもとに来ることはあり得ない。キリストと、キリストのもとに行くことができる唯一の手段を拒絶することは、私たちの罪が赦される可能性を拒絶することなのだ。

2. キリストを拒む者には、どれほどひどい罰が待っているのだろうか？ 質問に対する明白な答えは、肉体的な死よりもはるかに悪い罰が与えられるということだ。それは地獄での永遠の天罰である。
    - a. 多くの人々は、永遠の天罰という考えを好まない。しかし聖書は、地獄が実在すること、地獄が永遠の裁きの場であること、地獄にいる人々には決して救いが無いことをはっきりと述べている。
- C. さて、本文の最後の節を見て、背教に対するこの警告に関わるもう一つのこと注意到しよう。30節と31節と一緒に、私たちとの時間を締めくくろう。

VI. ヘブル10:30-31;

- A. 背教に対するこの警告は、意図的かつ意図的に罪を**犯し**続けること、裁きを予期すること、キリストを拒絶すること、そして最後に**神の正義に関わることを含んでいる**。

1. 復讐は我にあり、我は報いる」とあるのは、ギリシャ語で「復讐」とは正義の実行を意味する。
2. 神はなさることすべてにおいて公正であり、その中には裁きも含まれる。神は罪を罰せずにはおかないし、キリストの完全な拒絶を罰せずにはおかない。
  - a. 地獄や永遠の天罰という考えが嫌いな人もいる。愛の神がそんなことをするとは思えないのだ。
  - b. しかし、神の愛は神の正義、神の義、神の神聖さを否定するものではないことを理解しなければならない。
  - c. 神の正義が神の愛を否定することもない。事実、神の愛は、神の裁きから逃れる道を備えている：神は、正義を果たし、神の怒りから逃れる方法として、御子を私たちのために備えてくださったのだ。
  - d. ローマ5:8はこう宣言している。"しかし、神は、私たちがまだ罪人であったときに、キリストが私たちのために死んでくださったという点において、私たちに对您ご自身の愛を示しておられるのです"。(ローマ5:8)。
  - e. 神は愛の神である。そしてその愛は、御子が私たちの罪を自ら負われることによって、私たちに示された。
    - i. 罪を知らない方を、私たちのために罪とされたのである。(2コ5:21)
  - f. イエスが私罪となり、私たちの罪をその身に負われることによって、イエスは律法の正義の要求を満たし、正義が果たされ、私たちの罪はカルバリの十字架の上で罰せられた。
  - g. 私たちがただキリストを信じ、十字架の完成された業を信じ続けるなら、神は私たちに神の義を与えてくださる。
3. 神の愛を拒み、私たちに對する律法の主張を正当に満たそうとする神の試みをすべて拒んだとき、生ける神の手に落ちるのは本当に恐ろしいことだ。罪を罰し、神の本性に忠実であり続け、正義を下さなければならない神の手に落ちることは、本当に恐ろしいことだ。それは本当に恐ろしく、恐ろしいことだ。
4. しかし...しかし、私たちの罪の代価を払ってくださった生ける神の御手に落ちることは美しいことだ。神の愛の抱擁を知ること、すべてが満たされたことを知ること、正義が果たされたことを知ること、神の愛が成就したことを知ること。それは本当に素晴らしく、素晴らしく、美しいことであり、私たちの誰もが恐れるべきことではなく、待ち望むべきことなのだ。
5. 私たち全員の希望と祈りは、私たちの神であり救い主であるイエス・キリストの愛の御手の中に落ちることだ。私たちがキリストと、私たちの罪のために十字架上で完成されたキリストの御業に信頼し続けること。キリストへの信仰から離れることを決して考えないように。

6. 祈ろう。